

イザベラとタバサ

haou

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

イザベラが悪戯心から、タバサの勇姿を見てしまったら？

心のそこからタバサを認めて、あこがれていると自覚してしまったら？

自らの気持ちと願いを確信し、タバサにふさわしい存在になろうと決意したら？

目次

あんたを認めたらわたしに価値なんてないんだ。	1
わたしは何のために産まれてきたんだろう？	6
そうか。わたしはあんたのために産まれてきたんだね。	12
遅れちゃったけど、あんたとの約束、守ってみせるよ。	17
あんたにふさわしいわたしになるんだ。	21
あんたのためならわたしはどうなってもいいんだ。	25

来てくれてありがとう、私のエレヌ。	28
さあ、見ておくれ。わたしは、あんたに届いてみせる！	32
愛しているよわたしのエレヌ。	41
わたしを倒して世界を救う勇者となれ！	48
そして、悪い魔女は勇者に倒され、世界は平和になりました。おしまい。	53

あんたを認めたらわたしに価値なんてないんだ。

イザベラにとって、それは気晴らしの暇つぶしのつもりだった。

就寝前の娯楽として、忌々しいシャルロットの無様な姿を、あざ笑ってやろうという小さな企て。

「泥に塗れて無様に戦うお姿なんてのはどうだろうか？」

それはいい考えに思えた。地を這い、泥に塗れて無様に戦う姿はきつと面白い。

それにもしかしたらあいつの弱点や、汚点も握ることができるかもしれない。とても人に言えない後ろ暗い場面が撮れていたら、それをネタに脅してやったり困らせてやつたらさぞや愉快だろう。

あいつと親しい人間や味方する連中にその映像を見せるというのも良さそうだ。誰一人味方がいない本当の孤独を味わった時、人形娘はどんな顔をみせてくれるのだろうか？

早速、イザベラは、シャルロットに任務を命じた後、遠見と遠聴と記録のマジックアイテムを持たせたガーゴイルにその後を尾けさせ彼女の戦いの様子を記録させること

にした。

高性能かつ一点もののマジックアイテムを用意させるのは高くついたが、一国の姫には出せない額でもない。

あの人形娘を見るたびに感じる苛立ちや鬱屈とした思いを吹き飛ばせるなら問題はなかった。

「ふふふ、見せてもらおうじゃないか。腹がよじれるような無様な姿をさあ！」

幾度かの任務をシャルロットにやらせた後、ベッドに寝転がって、イザベラは記録装置を作動させて映像を視聴し始めた。

……数時間後。

「……すいこ」

彼女が見たのは、まるでよく出来た物語のように、主人公『シャルロット』が人々を救っていく様子であった。

ある時は、人間と翼人という種族の壁に引き裂かれた恋人の仲を取り持って、幸福な結末へと導いていた。

ある時は、最悪の妖魔たる吸血鬼を死闘の末に退治してみせ、元貴族だというミノタ

ウロスをも倒していた。

シャルロットは、まさに勇者であった。

時には強敵の戦いで泥に塗れることもある。

無様に地面に這い蹲ることもあった。

だがその度に何度でも立ち上がり、最後にはどんな敵をも討ち果たしていた。

「……すごいよ」

そこにイザベラが期待していたような無様さなどは微塵もなかった。

その姿は、ただひたすらにそれは見るものの心を打つものだった。

「かつこ、いい……」

そのあまりの眩しきは、イザベラに強く根付いているはずの劣等感すらも抑え込み、幼いころに感じたような素朴な憧憬の虜にしていた。

ただただ、見とれて、憧れた。

捻くれていない、純粹だった幼いころの気持ちでシャルロットを応援していた。

そして本心から思った。

「わたしも……あんなふう……」

幼き憧憬を口にしたその時、記録映像が終わり、イザベラは我に返る。

そして、己がこぼした言葉に唾然とする。

「わ、わたしは、なにを!？」

何年もの時をかけて、淀み溜まっていた劣等感すらも吹き飛ばしてしまうシャルロットの雄姿は、我に返ったイザベラには耐えられないものだった。

「あ、ああああああああ……!!」

それは、イザベラが決して見てはいけけない、絶対に認めても、憧れてもいけけないモノであった。

「わた、わたし、は……!」

イザベラに根付く劣等感も、傲慢さも、攻撃性も……すべては所詮、恐怖の裏返しでしかない。

常に立場を脅かし、周囲から愛情と敬愛を集める姿を見せつけてきたシャルロットから心を守る鎧なのだ。

それなのに、イザベラは無防備にシャルロットを認めて、思慕して、心の底から憧れてしまった。

「うっ、うっうっうっうっああ……!」

それは、イザベラにとっては精神的な自殺行為であった。

シャルロットを認めるということは、自身の無価値を認めてしまうことで、生きる意味も意義も何かも喪失することなのだから。

「ああ、ああああッ、あああああッツツツー!!!」

イザベラの心は急速に崩れ落ちていく。

イザベラは、こみ上げてくるぐちゃぐちゃの感情のまま、涙を滂沱と流して奇声を張り上げる。

「すんっ、ぐしゅっ、えぐっ……」

もはや怒りは湧かず、周囲の物にあたり散らすような痲癩も起こさなかった。

己が無価値と認めてしまったイザベラには、もはやそんなエネルギーは存在しない。

ただただ涙を流し続けることしかできなかった――

わたしは何のために産まれてきたんだろう？

(いったい、わたしって……)

数分か、数時間か……ただひたすらに、こみ上げるままに泣きはらしていたイザベラは思った。

わたしは何のために産まれてきたのだろう。

苦しんで憎んで傷つけて嫌われて。

わたしも周囲もみんなまとめて不幸になっただけだ。

そんなわたしが存在する意義なんてあるのだろうか。

始祖が、この世界に害悪を撒き散らすためだけに……人々を傷つけるためだけに、わたしをこの世に遣わしたというのだろうか。

そうとしか思えない。

振り返ってみても、イザベラは我侭で傲慢で虚勢を張ってわめき散らしていたばかりだった。

ひたすらに他人を苛め虐げ見下し罵倒して……

「このまま……わたしは、終わっちゃうのか……」

「これからも、自分も周囲も傷つけ続けて……最後にシャルロットに殺されちゃうのかな……」

シャルロットがジョゼフへの復讐のために戦っていることは知っている。

その娘であり、酷い仕打ちを続けたわたしもきつと……復讐を果たした暁には、討たれてしまうのだろうかと思っている。

だからこそ、シャルロットにひどい仕打ちをせずには、恐怖せずにはいられなかった。

「やだよ……そんなの、やだ……」

イザベラはそうつぶやいてみる。

だけど、それはきつと、叶わない。シャルロットが悲願を果たす日がくれば、わたしは終わってしまう。

自分ごときでは止められるとは思えない。あの父ジョゼフですら、物語の勇者みたいなシャルロットには敵わないだろう。

いずれその時がくれば、どうあがいても自分は死ぬしかない。

「いったい……わたしはなんだったんだろう。わたしはどうなりたかったんだろう？」
とくん。

そう考えるイザベラの脳裏に鮮烈に思い浮かぶのはシャルロットの雄姿。

自分が何を見て何を追いかけて何にすがっていたのか。答えなんて1つしかなかった。

(わたしは……わたしはきつと……)

どくんつ。

「ああ……」

高まり強くなる鼓動とは裏腹に、イザベラは自らの身体から力が抜けていつてしまうのを感じた。

胸が痛い。苦しい。モヤモヤして痛くて息苦しくて……今にも死んでしまいそう。

それは警鐘であった。イザベラの生存本能が必死に訴えているのだ。

これ以上考えてはいけない。

アイツから目をそらせツ、認めるなツ！

憎め、怒れ、恨めツ、アイツだけは絶対に認めるなツ!!

だが。

もはや、漏れ出した思考は止まらなかつた。

いまさら、自分に嘘をつくことなど出来はしなかつた。

あの憧憬を抱き、シャルロットを心のそこから認めてしまった時。

すべて分かつて理解してしまったのだ。

「わたしはっ！ シャルロットみたいになりたかった!!」

だからもう、イザベラは現実から目をそらさず、すべての現実を認めて、冷静に自分を見つめて思い返していく。

「シャルロットは昔から、すごい子だった……」

圧倒的な魔法の才能を持ち、英才といつてよい頭のよさもあつた。

それでいて心優しく純真で、周囲に温もりを与える太陽のような娘だった。

誰もが皆、彼女を褒め称えていた。

「わたしは、シャルロットみたいになりたくて、なれなかつたんだ」

ドットクラスの中でも格段に劣るレベルでしかない魔法の才。

小狡さと小賢しきでしかない悪知恵が廻る程度の頭脳。

平凡以下の運動能力。

シャルロットに比べて、イザベラはあらゆる面で劣っていた。

「なぜわたしはシャルロットではなかつたの？ なぜシャルロットはわたしじゃなかつたの？」

物心ついた頃、自分の限界と周囲の仕打ちに傷つききつたイザベラはそんなことも思つた。

シャルル叔父様なら、イザベラのような無能娘が生まれてきても、きつと優しく愛してくれただろう。

それとは逆に、いかにジョセフ父様であろうが、シャルロットみたいなでできる子が生まれたら、きつと愛して可愛がっただろう。

そうなるべきだったんだ。そうなっていたら、誰もが不幸にならなかった。わたしは救われていたのに。

でも、現実を呪っても悲観しても、現実が変わらなかった。

「だからわたしはあの娘を憎んだ。憎まなければわたしは、耐えられなかったから……」
あの娘がすべて悪い、わたしは悪くない、あの娘がいなければわたしは大事にされたいはず。

あの娘のせいで、周囲からの評価が低いだけ、わたしは無価値なんかじゃない。

「わたしはそうやって自分を醜く守っていたのに……」

「シャルロットは逆だった。いつも無邪気にわたしを慕ってくれた。ひねくれもので嫌われ者のわたしを姉様と呼んでくれていたんだ」

父はわたしを見てくれなかった。

母はわたしを疎み、顔を合わせるたびに、どうしてお前がシャルロットではないのかと嘆いた。

下働きの平民すらもわたしの陰口を叩いた。

でも、シャルロットだけはわたしが睨んでも冷たくしても、慕ってくれて仲良くしようとしてくれた。

落ち込んでいれば慰めようとしてくれて、魔法の練習に付き合おうとしてくれた。

そうか。わたしはあんたのために産まれてきたんだね。

「そうだ……その時にたしか……シャルロットと約束したんだっけ」

いつか、ふたりで力を合わせて、だいすきなおはなしに出てくるみたいなの『イーヴアルデイみたいな勇者さま』になろうねって。

悪い人をやっつけて、困ってる人たちをいっぱい助けてあげよう、ふたりの名前がおはなしの中に残るくらいに！ って。

「シャルロットはもう、約束を守った」

すでにシャルロットは、理不尽にも残酷な現実にも耐えて、人々を助ける『勇者さま』へと至った。

なのに今のわたしは……『我侷な小娘』でしかない。

そしてこのままでとそれは永久に変わらず、無為に死ぬだけだ。

「このままじゃ、わたしは、うまれてきた意味がない」

「このままじゃ、シャルロットの従姉妹である資格がない！」

イザベラは泣き腫らした瞳で、そうつぶやく。

願望が胸の奥から湧いてきて、絶望の色に染められていた目に少しだけ生気が戻る。

「わたしは、シャルロットとの約束をまもりたい」

ゆつくりとかみ締める様にイザベラが言葉が続ける。

その瞳には、小さな決意の灯が生まれて初めてともつていた。

「シャルロットと一緒に、おとぎばなしに名前を残すような、すごい存在になりたいんだッ！」

心そのままにそう叫ぶ。

そうだ。そうなんだ。わたしは確かにそれを目指してそうなりたいと願った。周囲も親も関係ないって思っていたのに。

しかしそれはもはや不可能だ。

今さらシャルロットに許しを乞うても、彼女と共に歩むことなど出来はしないだろう。

彼女にとってはイザベラは怨敵の娘であり、散々に自分を苛めぬいて死地に送りつけた存在なのだから。

「わたしはバカだ。一番の望みから目をそらして、気付いたときには遅すぎた……」

「わたしなんかあの子と一緒に……あれ？」

そこまで考え、生きる意志が萎みかけたところで、はつと気付く。

「え？ あれっ？」

おはなしには……勇者と同じくらい大事な役どころがあったのではないか？

その役は勇者と並び立ち、対峙するというとても重要な役であったのではないか？

「ああッ!? ああああああッッ……!!」

その『考え』を脳裏がよぎったとき、イザベラは雷に打たれたように、全身を震わせた。

「そうだ」

「そうじゃないかっ!!」

わたしが、この、イザベラ・ド・ガリアが……

「この世でいちばんの悪になれば？」

それはイザベラにとっても甘美な思いつきであった。

勇者になったシャルロットにふさわしいほどの、世界を脅かす最悪の魔女となること
が出来たなら！

「わたし達のおはなしが！ ハルケギニア中で語られるッ!!」

シャルロット・エレヌ・オルレアンとイザベラ・ド・ガリアの名と戦いが永遠にこの世界に記憶される。

その様子を思い浮かべたイザベラの背筋に、強烈な歓喜の痺れが走る。

「わかった」

そうつぶやいたイザベラは、自分の視界に光が満ちたような錯覚を覚えた。

「ついにわかったよ」

何故自分に魔法の才がなかったのか？

何故自分は矮小で傲慢で我侷で無能なのか？

何故自分は愛されず、周囲を憎んだのか？

それらにはすべてに意味があり、わたしは導かれていたんだ。

「それが私の道。わたしが生まれてきた意味なんだ……!!」

この『確信』は彼女にとってまさに神託であった。

「ああ、始祖よ！……これまでの度重なる不敬の数々をどうかお許しください！」

イザベラは生まれてから今まで、始祖に呪いとうらみの言葉ばかりかけていた。

そのことを今彼女は猛省していた。

始祖は生まれたときからイザベラに明確な役目を与え、道を示してくださっていたのだ。

強くてすごくてかっこいい、あのシャルロットと対峙する敵というこの上ない役目を

！

なんとという不敬だろうか。イザベラは大仰に懺悔の言葉を吐いてその場に跪く。もはや死は免れず、シャルロットと共に生きる道は、ない。

だが、わたしの生は、無駄なんかではない、無意味なんかじゃない。

それを示すべは残され、託されている。

「私にこのような役目を与えてくださったことに感謝いたします」

イザベラは生まれて初めて、始祖ブリミルに心から感謝の祈りを捧げた。

己が使命を確信し、一心不乱に祈り続けるその姿は、まるで信心深い聖女のようにあつた。

遅れちやつたけど、あんたとの約束、守ってみせるよ。

「地下水。お前からみて正直なところをききたい」

「はっ。なんなりと」

プチトロワの謁見の間。そこでイザベラは地下水を呼びつけていた。

「あの人形……いや、シャルロットと今の私との力の差はどのくらいだ？ 100回戦って私は何回勝てる？」

「そ、それはなんといいいますか。まあ。頑張ればきつと勝つことも出来なくもないのは……」

本当のところを絶対には言えない質問をされ、地下水はしどろもどろに答える。

我ながら説得力のかけられないと思いつつ、この劣等感が一際強い癩癩姫に本当のことをいうこともできず困り果てた。

「私はね、嘘がきらいだよ地下水。特に見え透いた嘘でご機嫌取りをする奴がね」

「もう一度聞くとよ。100回戦って何回勝てそうだい？」

「ふう。100戦100敗でしょう。天地がひっくり返ろうと勝つのは不可能です。1000回でも1万回でも同じことですな」

虚偽は許さないとわれ、やけくそ気味に地下水が答える。

一片の嘘もない、プロとしての冷徹な現実を述べた。

さて。痲癩を爆発させるであろう姫をどうなだめたものか。と地下水が逡巡していると、イザベラは愉快そうに笑い始める。

「はは、あはははははははははっ！ そうかい！ わたしが1万人いようがアイツ1人に勝てはしないか。これは傑作だね！ わたしはアイツの1万分の1以下ってことかい。ふふふあははは」

「まさに絶望的……絶対的な差があるわけだ！ ふふふふ、そうさね、そうでないとダメだよ。それでこそだ！」

喚きも怒りもせずにただ愉快そうにするイザベラが不可解すぎて地下水はうろたえる。

もしやイザベラは劣等感のあまり心が壊れてしまったのかとまで疑ってしまふ。

「えつと、まあこればかりはその。どうか気になさらずに。心を安らかにですな」

「それで、だ。戦闘のプロであるあんたはそう言うが私はそうは思わない」

「はあ」

「そんな絶対を覆し、凡才が天才と並び立つ……偉業だとは思わないか？ まさに革命的な出来事だよ」

「1年だ。1年で私はあいつの隣に立つてみせる。何が何でもそうやって見せなくてはいけないんだ」

絶対に無理だ。地下水は内心思う。この冷徹な現実世界には意志の力でどうにもならないことなど山のようにある。

イザベラは甘ったれた姫だ。本気を出せば世界を、現実を変えられると甘い考えを持つているのだろう。

たとえ一心不乱に必死で努力をしようが、どうしようもない現実の壁は存在するのだ。

努力が必ず報われるなどありえない。才能の差はどこまでも冷酷で絶対であるのだ。

「それは、また……しかしその」

「まあ聞きな。これから1年で私はね……」

不適に笑みを浮かべるイザベラから語られるその計画。

それを聞いた地下水はまず唾然として愕然として驚愕した。

まず正気を疑い、次に説得をして、最後には柄にもなく説教までした。

しかし、彼の主は、己が死期を悟り決意を固めてしまっていた。

もはや何を言おうが彼女は意思を覆さない。

「……………」

地下水は確かに彼女の言う計画を実行すれば、無才のイザベラがあ的那天に一矢を報いることはできるかもしれないと認めたと。

だがそんなことに何の意味があるのだろうか。

一瞬の閃光のように輝いて消えるのだと。憑き物が落ちたように清々しく語って笑うイザベラを見て、地下水は言いようもなく悲しかった。

あんたにふさわしいわたしになるんだ。

「うっ……えぶっ……」

イザベラは、彼女専用で作られた化粧室で、涙を流しながら何度も何度も嘔吐していた。

胃の中が空っぽになって、酸っぱい胃液しか出なくなっても、吐き気は治まらず、えずき続けていた。

イザベラは所詮、ただの我侷な小娘だ。

心から楽しみながら、平然と無辜の命を刈り取るなど出来はしない。

だが、彼女は殺した。

手始めに、軽い粗相をしたメイドを1人手打ちにした。

次に、ソレを目撃し、恐慌して騒いだメイドを2人、レビテーションで浮かべて窓の外に放り出してやった。

最後に、仲間の死におびえきったメイド達から戯れに犠牲者を3人選び、刃物を使ってじわじわと傷つけながら戮り殺した。

どうか、内心の動揺を悟られずに残酷な演技をやりきり、逃げるように化粧室へと駆け込んだが、そこで限界を迎えて、今に至っている。

自分の手に残った嫌な感触が、悲鳴が、肉と血の匂いが、忘れられない。

それらが脳裏にフラッシュバックするたびに、イザベラの心は折れそうだった。

「ちくしょうっ!!」

そんな情けない自分にイザベラは、張り手を見舞う。

今更止めるなんてできない、それだけは絶対にダメだ。

何を犠牲にしても、成し遂げると決めた。

すでに手を汚してしまい、引き返せないし、エレヌとの約束は破れない。

だから、もつとだ。

まだ足りていない。こんな、こんなていたらくではシャルロットにまったくふさわしくない。

わたしは、まだあいつにふさわしいほどの悪になれてない。

あいつの相手は、こんな小物ではつとまらない。

ぐつと顔をあげて、鏡を見て歯を食いしばる。

無理やりに引き攣る頬を動かし、ニタリと笑みを浮かべてみせる。

ダメだ！ もつと優雅に、もつと残酷にだ!!

そうだ、仕草は大きく。

大仰に、迫力を込めて。

暗示をかけるように、イザベラは鏡越しの自分に言い聞かせ、折れそうな心を鼓舞していく。

世界が我が物であるかのごとく振舞え。

見るものすべてに畏怖と恐怖を与えろ。

不吉と巨悪の象徴たれ。

漆黒の闇の中に咲き誇る大輪の花になるのだ。

「くっ、ふっ、ふっ、そうさ、やってやるっ！ なってみせる!!」

狂ったように笑うと脳裏に次々と名案が浮かんでくる。

そうだ、美しい生娘の生き血を浴びて美を磨こう。

そうだ、妊婦の腹を割いて赤子もろとも惨殺してみせよう。

そうだ、仲睦まじい恋人達を殺し合わせてみよう。

そうだ、城下で平民に難癖をつけて残酷な拷問を見世物にしてやろう。

そうだ、世界中に吟遊詩人を放ってわたしの悪行を世界中に知らしめよう。

もつともつと力をつけよう。おぞましい呪いのアイテムを持ち、邪悪な異端の呪法を

覚え、禍々しい武器を持つとう。

「待つてなよエレヌ！ 絶対にあんたにふさわしくなってみせるから!!」
そう宣言したイザベラの震えと吐き気はもう完全に収まっていた。

あんたのためならわたしはどんなつてもいいんだ。

「いやいやいや。率直に言って、驚きましたよ」

「絶対途中で音を上げると思いましたが、まさかやりきってしまわれるとは」

プチトロワの謁見の間で跪いているメイドが言葉を発する。

しかしそれは男の声だった。身体は間違いなく女だというのに男の声でイザベラに語りかけていた。

「しかも、これほどの強さになられるなんて想像もしなかった」

「そうかい、我ながら上出来だよ。これならあの娘にふさわしいはずさ」

「二年にも満たない期間でよくぞここまで……鍛錬を始めた際にはあの方に比する力量など不可能だと思いましたが……」

「まあ、何もかも捨てたんだこれくらいにはならないと報われないつてもんさ」

「それはたしかに。連日の過酷な鍛錬と並行して強化薬物の投与に魔法具や先住魔法による肉体改造……その上、得体の知れぬ異端の呪術の習得をしつつ、ミノタウロスや吸血鬼の血肉をも取り入れましたからな」

「いやはやよくぞ生きているものですよ。とつくに死んでいてもおかしくない」

「最初こんな無茶苦茶な計画を聞いた時は、ついに頭がおかしくなったのかと思いましたが……」

「そういえば元素の兄弟がこんなバカなことはやめるように言ってたね。大金を積んだから喜んで協力するもんかと思っただけ……」

「お前もそうだがみんなして案じてくれるなんてわたしも意外と人望があつたんだねえ」

「意外なんてとんでもない。イザベラ様は慕われておりますとも」

「はんっ！ みえすいたおべっかはいらさないよ。それより、例の件の首尾はどうだい？

問題ないだろうね？」

「ええそれはもちろん。主要各国への設置はすでに終えてあります。エルフ領は未だですが、元素の兄弟が向かっておりますので、数日中には例の装置の設置を終えるはずですよ」

「そうかい、それは重畳だ。元素の奴から報告が入り次第、おまえは愛しの勇者様にわたしからの招待状を渡してくるんだ。分かったら下がりな」

「了解」

そうやって”地下水”はその場を後にする。

彼の退室を見届け、イザベラは大きく息を吐いて、玉座の肘掛にもたれかかった。
「ぐっ……」

その額にはじつとりと大粒の汗がにじみ、その顔色は青い。

それは明らかにイザベラの体調が悪いことを示していた。

「つうッ……!」

全身に走る痛みにイザベラは額をしかめる。

「……身体を隈なくいじくって、人間をやめたんだ。こうなることは当然か」

「まあいいさ。来るべき日に全力さえだせれば……問題ないからね」

息を乱しながらイザベラは高鳴る胸を押しえて部屋に戻っていったのだった——

来てくれてありがとう、私のエレース。

黒一色に塗りつぶされた城壁。

茨の蔦があちこちに絡みつき、血のような真つ赤な花を咲かせている。

そんな、魔王の居城のような威圧感をかもし出すプチトロワの中でタバサはイザベラと対峙していた。

「久しいねえ、人形娘……元気だったかい？」

人骨と人皮で作られた禍々しい玉座に座り、侍女の生き血を注いだワイングラスをくるくると手でもてあそんでいる美女の名はイザベラ・ド・ガリア。

ジョセフの死後、配下の北花壇警護騎士団を使って電撃的にガリア王国の政府機能を奪い、その全権を掌握。

それと同時に世界中にばら撒いた火石とその起爆装置で、全世界を恐怖のどん底へ叩き落した最悪の魔女であった。

吸い込まれるような黒と、目も覚める鮮やかな朱のコントラストが禍々しいドレスを着て、胸元を大胆に覗かせている。

「……………」

イザベラがタバサの前に姿を見せなくなつて一年あまり。

その間に彼女の様子はまったくの別人といつていいほどに様変わりしていた。

一瞬タバサの脳裏に偽者や操られているという可能性がよぎるが、その声は紛れもなく従姉妹のものだし、意識も明瞭そうで魔法やアイテムによる洗脳でもなさそうだと。ならば、気まぐれか、乱心か。それならばやめさせればいいだけだ。とタバサは脳内で結論を出す。

「相変わらずだんまりかい？ ふふ、あんたは変わらないねえ」

そう言いながらイザベラはけだるそうな仕草で足を組み替え、乙女の血で喉を潤す。

「おい、キセルを超越しな」

玉座のそばに控えていた生氣のない侍女に空のワイングラスを押し付け、代わりにキセルを受け取る。

そして、ゆつくりとした優雅な動きで、すはあーとキセルから紫煙をくゆらせた。

「……何のつもり？」

タバサが氷のように冷たい目でイザベラを見据えるが、イザベラは、顔色一つ変えず、微笑みをたたえて首をひねるだけだ。

「何がよ？」

上質な絹のように艶やかな青髪をかきあげるその仕草はまるで、極上の高級娼婦。一

国の王をも手玉にとりそんな毒婦のソレだった。

イザベラはまだ20にも満たない歳でしかない。なのに、死の匂いを漂わせる魔性の色気と威厳をかもし出していた。

「とぼけないで……こんな馬鹿な真似はやめて」

呵呵とイザベラが笑う。

「そうだね、なにせあんたは勇者さまだ。世界の危機は見過ごせないだろうよ……くつくつく」

「わたしはね、こんな世界なんざどうなるうがどうでもいいんだよ。ただあんたをぶつ倒して、這い蹲らせて、命乞いをさせたいだけだ」

「……っ！」

それを聞いたタバサの瞳に怒気が宿る。

「そんな、ために……そんなことのために……？」

「そうさ！ 綺麗な花火だっただろう？」

イザベラは、世界を脅す際、嘘や冗談ではない証として各国の都市を一つずつ灰にしていた。

「なんで……」

「ご託はもういいだろ、勇者さま。決着をつけようじゃないか」

イザベラがパチンと指を鳴らすと、玉座の一角を占めていた魔法装置が動き始める。同時に、トリスティン、ロマリア、ガリア、アルビオン、ゲルマニア、クルデンホルフ、エルフ領、ハルケギニア中の上空にタバサとイザベラが対峙する玉座の様子が映し出される。

小国の国家予算並の莫大な金額をかけて、このためだけに作られたその魔法装置の映像に世界の人々は釘付けとなっっているはずだ。

「さあ、世界の行く末をかけた決戦のはじまりだ」

イザベラがゆっくりと玉座の傍らに手を伸ばし、そこに立て掛けられている禍々しい意匠がこらされた大鎌を手にする。

それにあわせるように、タバサも父親の形見である杖を構えると。

イザベラが飛び掛るようにタバサに襲いかかった――

さあ、見ておくれ。わたしは、あんたに届いてみせる!

ガンツ、ガギイツ!! 剣閃きらめき、甲高い金属の音が玉座の間に響く。

「あはっ、あはははははははっ!!」

イザベラはかつてない歓喜の中にいた。

その身体に似つかわしくない巨大な戦鎌を振り回し、タバサの持つ無骨な杖と激しくぶつけあい火花を散らす。

斬り、受け、かわし、叩き、返し。

まるで優雅な舞踏のように、ふたりは命のやり取りを続けていた。

「ふふふっ、どうだいっ、わたしはあんたにふさわしくなれてるかい!」

自分はこんなにも戦えている。

あの、シャルロットと対等に競えている……!

その事実だけで、文字通り血反吐を吐きながら、地位もプライドも未来も……なにもかもを捨て去った己の身が報われた気がした。

以前の自分、昔の自分。

弱いだけの、腐っていただけの小娘のままであつたなら。

こんな歓喜に身を焦がすことなどは到底不可能であったろう。

ただただどこまでも沈んでいくような劣等感の沼で溺れるだけだったろう。

イザベラの胸に充実感が湧きあがり、力があふれ出て瞳が真っ赤に輝く。

「生きてるっ、生きてるよっ、わたしは今っ、生きてるんだツッ!!」

弱いわたし。なにもできない昔のわたしなら、一合も打ち合わせぬうちに、地に伏していただろう。

意地を張り切れずに、すがりついて無様な命乞いをしただろう。

だがどうだ!

今、わたしは拮抗している。

あのシャルロットと並び立てている。

そのことがどうしようもなく、イザベラは嬉しい。

今ここにいるのは……憧れ、追い求め、恋焦がれたシャルロットに並び立つにふさわしい、悪としてのイザベラであった。

「どうしたどうした勇者さまッ!! あんたの力はこんな程度じゃないはずだ!」

「さあッ、底力を見せなッ! 救って見せなよ世界をさあ!!」

「……強い」

タバサは最後にみたイザベラの姿からは想像もつかないそのあまりの強さに内心で

驚愕しつつ、必死でイザベラが振るう鎌を受け流していた。

型や構えも年単位で濃厚な鍛錬を積んだ戦士のものに思えた。

油断をすると腕ごと持っていかれそうなどんでもない膂力。うかつにまばたきも出来ない速度もある。

たった1年足らずで人間が……それも少し前までは運動もろくにしていなかった少女が至れる境地ではない。

タバサの頭によぎるのは、イザベラが何らかの外法を用いているのではないかという疑い。

「……強い! 強いだって!? ははははははっつ!! うれしいねえ、わたしはうれしいよ」

この世の愛憎をすべてぐちゃ混ぜにしたような混沌とした狂相を浮かべるイザベラ。

「あああつ……エレヌ……!!」

イザベラにとってタバサとはすなわち『全て』であった。

在りし日に孤独を癒してくれた唯一の友であり、強くて凄く憧れの人であり、優しく可憐な想い人であり、己の地位と居場所を脅かす最悪の敵であった。

間違いなく、イザベラは愛していた。この世でもっともタバサを想い愛して、そして同じくらい疎んで嫉んで憎んでいた。

「あんたにそう言わせたいから！ 思わせたいからッ!! わたしは全部捨てたんだ!!」
「……もう、人間じゃ、ない」

ガギイイツ!!

大きく振りかぶった一撃をタバサは杖でがっしりと受け止める。

「そうさつ、そんな粹に囚われて、自分を可愛がってちゃ……あんたには、おいつけやしないんだ!!」

イザベラはそのまま力まかせにタバサを押しつぶそうと力を込める。

「あああああああアツツツ!!」

しかし、タバサはぐつと足を開いて、力学的にもつとも安定する姿勢でそれを受け流した。

「イザベラなんて小娘の器はねえッ、ちっぽけなんだッ! でもさッ……!! それでもっ!! どうしてもっ!!! 何が何でもあんたを目指したかったッ!!!」

イザベラは絶叫しながらさらに力を込め、タバサを徐々に押し込んでいく。

「惨めで、哀れで、最低な……こんなわたしにも夢があつた! あんたと同じになりたかった!!!」

「だから……だからああ……っ!」

「アアアアあああああああアツツツ!!!」

だが、イザベラの腕は押し込みきれずに、途中で止められてしまう。タバサには実戦で鍛え上げられた経験があった。何よりも、もって生まれた天賦の才があった。

ゆえに。化生と化し、肉体強化の薬漬けになり、体内に埋め込んだ無数の魔道具までもを駆使しているイザベラとも拮抗できていた。

「……………」

力の分散、あるいは集中と利用。

タバサの扱うものは研ぎ澄まされた技巧の極地であった。

「ぐぐつ、ぎぎつ、アアアアあああああああああッッッ!!!! とどかせるッ、わたしはあんたに届いてみせるんだ!!」

「……………もう十分」

タバサは冷徹の瞳の奥にかすかに動揺と憐憫の色を浮かべ、そう言った。発せられた声は感情が込められていないように聞こえるものであったが、イザベラにはタバサが自分を心配してくれていることがすぐにわかった。

なにせ、ずっとずっと昔から一緒にいた、付き合ってきた、今では命を賭けてでも傍らにいたいと思う相手なのだ。

「このままだと勝つても負けても……………死ぬだけ」

を貸しな!!」

「○▲☆×◆!」

タバサにはまるで聞き覚えのない……いや、聞き取れない異様な詠唱呪文だった。とつさにドットスペルでのカットを考えるが、イザベラを守るように発生する黒い霧を見て即座に無駄だと判断。

すぐに得意とする魔法であるウインディ・アイシクルでの迎撃の方針に切り替える。

「ラグーンズ・ウォータル・イス・イーサ・ウインデ……」

詠唱を口ずさみながらタバサは考える。

イザベラが唱えているのは先住魔法? いや、それにしても妙に禍々しすぎる。

タバサが見た先住魔法はもつと別の感じがした。精霊を役役するといふそれらとは性質が違うように感じた。

あれは、生命と引き換えに力を搾り出すような、異端の呪術か何かなのだらうかとあたりをつける。

「どうだい、わたしにお似合いの魔法、だらう?」

イザベラの身体を覆っていた黒い霧が、虚空に凝縮されて、無数の矢を作り出す。奇しくもそれは、タバサの得意とするウインディ・アイシクルのようだった。

「……っ!」

イザベラの作り上げた闇の矢の群れに込められた魔力の強大さを感じたタバサはまたしても驚きを隠せない。

イザベラは落ちこぼれのドットでしかなかったはずだ。

人間をやめ、化け物になったとしても。手段を選ばず外法に身を染めたとしても。

スクウェアとして覚醒した自分を上回るほどの、魔法の力を身につけるとは信じられなかった。

「くらいなっ!!」

イザベラが闇の矢を放つと同時に、タバサもそれを迎撃する。

「ぐっ……うっ！」

ぶつかり合った瞬間に、周囲に吹き荒れる冷氣と、おぞましい闇の嵐。

莊厳な調度品が、破壊され、吹き飛ばされていく。

その嵐が止んだとき、打ち勝っていたのはイザベラであった。

黒い霧にはじかれるように吹き飛ばされたタバサが床を転がりすべる。

「ははははははっ、勝ったのか、わたしがエレメに魔法で!? さすがだよ、命を賭けた甲斐が……がふっ!?」

だが。

本来なら絶対にありえない、魔法対決での勝利は、イザベラの肉体に大きな代償を払

わせていた。

「ぐっ、うう……げふっ、がひゅう……」

大きく咳き込んだイザベラは鮮血を吐き出してその場にひざまずく。

「ぐうううううううっ」

その身体には常人ならば狂死しそうなほどの激痛が走っていたのだ。

「あああつ! あああああつ!! 痛い、痛いよエレーヌ……」

だが、ソレにもかかわらず、彼女の瞳は爛々と輝いてタバサに見つめていた。

「でもねえ、嬉しくつてえ、楽しくつてえつ、それどころじゃないんだっ!」

「……さあツ、第二幕といこうじゃないか」

愛しているよわたしのエレヌ。

「立ちなよエレヌ。あんたの力はその程度じゃあないはずだよ」

口にたまった鮮血をぺつと吐き捨て、震える身体を抑えつけてイザベラは立ち上がり、鷹揚に手招きをする。

タバサは、派手に吹き飛んだ割にダメージは少なく、簡単に立ち上がった。

半ば自分から吹き飛んで衝撃を殺し、黒い霧から逃れていたのだ。

競り合いに勝ったのはイザベラではあったが、ダメージははるかにイザベラの方が大きい。

「さすがだね！　そうでなくっちゃ化け物になった甲斐がない」

このまま勝負を続けたところで、イザベラの敗北は確定した状況にある。

だが、イザベラはタバサに不適に笑いかける。

「知ってるかい、追い詰められた悪役ってのは変身するのがおやくそくなんだよ」

イザベラが、胸元に埋め込まれていた黒い水晶の珠に触れると、彼女の身体を覆う霧がすべて彼女の体中にしみこむようにまとわりついた。

「ぎぎっ、ひぐっ、あがあっ」

イザベラの体中に刺青のような紋様が刻まれていく。

黒い角が生え、爪は伸び、黒い羽が生える。

血管が皮膚表面にくつきりと浮かび上がり、限界まで拡張して脈動するようにのたうっていた。

身体を作り変られていくあまりの痛みに絶叫する。

「あああああああッッッ!!!」

頭を押さえてうずくまるイザベラの口、鼻、目から血が流れ落ちる。

苦しきもだえるイザベラの脳裏に、かすれるようなドス黒い声が響いてきた。

『もつと、お前にチカラをやるう。苦しむことはない。意識を渡せ……』

「だ……だまれ！ わたしの聖戦を邪魔するんじゃない！」

だがイザベラは己の手綱は決して放さない。

『支配を受けいれろ。すべてを……』

「ひつ込め下郎！ お前なんかにわたしはやらない！ エレーヌ以外に渡してやるもん

か！」

『……愚かな。後悔するぞ……』

「クソがッ！ 黙れ黙れ黙れエエッ!! わたしを、舐めんなああ!!!」

イザベラの意識を強引に奪い取ろうと、どす黒いチカラがイザベラの全身を駆け巡り、さらなる激痛を与えてくる。

「ぎぎっ、ぐぎっ、ひぎぐうああああッ!!」

だがイザベラは、唇を噛み切り、己の腕にまで噛み付いてまで、己の身体に絶対に意識を渡さないと言い聞かせる。

「わたしは！ わたしはイザベラっ、イザベラ・ド・ガリアなんだよオオオッ!!」

取り込まれるのではない。イザベラが、闇を取り込むのだ。

「約束を果たすんだ！ 守れなきや死んでも死に切れないんだよっ!!」

イザベラの執念はどこまでも本物で一途。

その執念が邪悪なる意思に勝った。

「なんで……？ どうしてそこまで……」

その様を見てタバサが呆然とつぶやく。

「そんなに……そこまでするほど、わたしが、追い詰めてしまったの？ 憎い、の？」

「違うっ！ それは違うんだエレーヌ。わたしは、愛してるんだ！ ずっとずっとあんなだけを見てきた！ あんたのそばにいらればそれだけでよかったんだっ!!」

「ああっ、好きだっ、大好きなんだよ私のエレーヌ、わたしだけのエレーヌ！ わたしと

だからこそ恐ろしい。

理性のない化け物ではない、人間が化け物を制御しているのだ。人間の強さと化け物の強さを兼ね備えている。

いわば最悪の敵。

なのに相手を侮つて情けをかけて迷っているようでは勝てるはずがない。

これからは攻守交替。全力で攻め滅ぼすとタバサは覚悟を決める。

「全力で、あなたを倒す……！」

「わたしを殺しておくれツ、エレーヌウ!!」

ふたりの得物が交差する。

次の瞬間、ごきゅぐじゅんっ！と骨が砕け肉がはじける音が周囲に響いた。

「がひゅっ……!!」

あまりにあっけなく——がむしやらに懐に飛び込んで放ったタバサの捨て身の一撃が、紙一重でイザベラの左胸に大穴を穿った。

イザベラに油断はなかった。

身体に残る力をすべて一撃に賭け、それでなお敗れた。

「……………」

ドサリと。地面に倒れ伏すイザベラをタバサが見下ろす。

その姿に油断はない。

「く、くく……や、やつぱりつよいねえ、とんでも、ないよ……あ、あんたは……」

イザベラは這いながら、右手をタバサに伸ばす。

両者の距離は遠く、その姿はまるで太陽を掴もうとする患者のようであった。

「……油断はしない」

タバサは感情を宿らせない瞳のまま、イザベラが余力を残していると判断し、杖を振り、ウインディ・アイシクルを唱えて、彼女に氷の矢を降り注がせた。

「がひゅぶああっ!」

手に、足に、腰に、背に、首に無数の氷の矢が突き刺さり、イザベラを地面に縫いとめた。

確実な致命傷。

最悪の妖魔といわれる吸血鬼ですら絶命する一撃であった――

わたしを倒して世界を救う勇者となれ!

「……終わった」

タバサは、少しだけ表情を歪めつつもイザベラの確実な死を確認すると、すぐにきびすを返す。

彼女の亡骸から逃れるように早足に歩きながらタバサは思う。

変わり果てたとはいえ、憎まれていたとはいえ、謀殺されそうになったとはいえ。

彼女は……イザベラは姉と慕う家族であった。

そのイザベラを完膚なきまでに殺してしまった。

タバサはすでもっとも憎むべき相手を失っている。復讐もスッキリとしない形だ
がかなえられた。

もう殺し殺されるような戦いは嫌であったのに。

心優しい少女であるタバサにはこの戦いは、どこまでも不本意なものでしかなかった。
た。

「……私のせい、かもしれない」

知らなかった、悪気はなかったとはいえ、イザベラを追い込みあんなになるまで、苦しめていた。

何もかもを捨てても殺したいほどに憎ませてしまった。

どんなことをしてでも殺したいほど憎む。

イザベラにとって、タバサはジョセフと同じであったのかもしれない。

あんなにも憎んだ仇と自分の姿が重なってしまう。

「でも、私は彼女を殺した」

もしかしたら自分は彼女に討たれてあげるべきであったのかもしれない。

今際の際に、ジョセフが自分を討つように述べたように。

「私は……ジョセフよりも……」

「勘違いするなっ!!」

「わたしはお前とは違う、わたしの戦いは、復讐のためなんかじゃないっ、わたしの気持ちはそんなものじゃないんだ!!」

「……っ!?!」

驚愕。

一体今日何度目になるか分からない驚きを胸にタバサはイザベラの死体に振り返る。

そこにイザベラは立っていた。

身体中に氷の矢を生やし、胸に大穴を開け、片目はつぶれ、腹からは内臓ははみ出て、口は耳まで裂けている。

生ける屍となったイザベラの指に嵌められた指輪が光を放ち、彼女を包んでいた。

「……アンドバリの、指輪……!?!」

「そうさ! わたしは魔女だ、最悪の魔女なのさ、この程度で死んでらんないんだよ!!」
水色の光が彼女の全身を覆い、ぼろぼろの肉体を稼動させる。

骨も筋肉もズタズタで物理的に動けるはずのない彼女の身体を水の精霊の力によって操り動かしている。

「死体は動いた。さあ、第三幕の始まりだよ」

そして三度、死闘は続く――

「ハアハアハアツ……」

タバサは疲労困憊の限界であった。

戦い続けてすでに数時間。

その経験と実力で、イザベラを何度も葬ってきた。

だが彼女は、その度に黄泉がえり、這い上がり、タバサに迫ってくる。

「……オオオオオオオオオオンッツツツツ!!!」

化け物の咆哮が周囲をビリビリと震わせた。

今もそうだ。

死にながらも動き続けるイザベラの肉体をアイス・ストームにより凍結させて打ち砕き、その首も切り飛ばして、今度こそ勝負はついたと思った。

だが。

「エレ……ヌウウウツツツ」

ところどころ腐敗したキメラドラゴン。

禁忌に手を染めたメイジによって生み出された異形の化け物と融合したイザベラが絶叫する。

その瞳はすでに何も写さない。

もはやろくな思考も理性もないのだろう。

その状態であつても、イザベラはタバサを覚えていた。

キメラドラゴンの制御をのつとり、タバサだけを狙う。

恐ろしい。

その知れないイザベラの執念にタバサは恐怖を覚える。

そこまで自分にこだわれるイザベラが怖い。

そこまで執着されることが怖い。

そして何より、そんなイザベラの姿が悲しくて仕方がなかった。

だから、絶対にイザベラを執念という呪いから解き放つことをタバサは決意した。

「今度こそ終わらせる。なにもかも、完膚なきまでに」

その瞬間、もはや勝敗は決した。

世界を脅かす邪悪は勇者によつて滅ぼされ、世界は救われる。誰よりもイザベラがそれを望んでいるのだから。

そして、悪い魔女は勇者に倒され、世界は平和になりました。おしまい。

人々が皆、夜空を見上げていた。

星空に大きく映し出されている映像は、世界の存亡を賭けた戦い。

小柄な青髪の女の子が杖を片手に、禍々しい大鎌を振り回す凶悪なる魔女と戦っていた。

その様子は、おはなしで語られるような勇者と魔王の戦いのようなものであった。

卑劣な魔女の容赦のない攻撃のたびに、小柄な青髪の勇者は地を転がり、傷を負っていく。

——だが。

なんど倒されても、なんど傷つけられてもその女の子は決して諦めない。
何度でも立ち上がり、悪しき魔女に立ち向かっていく。

人々は皆、真剣な表情で固唾を呑んでそれを見守っていた。
卑劣な魔女は、己が勝利の暁には世界を滅ぼすと公言している。
小柄な青髪の勇者が負けることは、この世の終わりを意味した。

「がんばれっ!!」

こみ上げてくる気持ちを我慢できなくなったのか、一人の少年が天に向けて、声を上げる。

「そ、そうだつ、勝てつ、勝つてくれ!」

その声に触発されるように、大人たちも次々に応援の声をあげていく。

「あんなのに負けないで！ 勇者さまっ！」

「頼むっ、世界を救ってくれえー!!」

そこに分け隔てはなかった。

男も女も、子供も老人も、平民も貴族も、人間もエルフも。

トリステインでも。アルビオンでも。ゲルマニアでも。ガリアでも。クルデンホルフ大公国でも。エルフ領でも。

その日、ハルケギニア中の生きとし生けるものが同じ願いを天に祈った。

タバサという名の勇者の勝利。ただそれだけを。

(ああああ……)

ゆつくりと、浮遊感とともに、イザベラはすべてが終わっていくのを感じた。

もはやほとんど見えない目は、それでも、シャルロットの姿だけは写し続けていた。

(すまな、い……もつとまえに、すなおになれて、いたら……)

シャルロットは泣いていた。灰となって崩れ落ちる変わり果てたイザベラの姿を眺めて幼いころのように泣き崩れていた。

(優しいエレエヌ……わた、しの、エレ、エヌ……)

この日、世界は勇者の手によって、滅びから救われた。

タバサの勝利は、映像によってハルケギニア中に届いていた。

世界中がタバサの勝利に湧き、彼女を讃えた。

世界を救ったタバサは誰一人の反対も受けることなく、ガリアの女王となった。なにせ、世界中にその名と顔を知られたもつとも新しい英雄譚の主人公なのだ。

そのことが全てを良い方向に進めた。

国民は喝采を上げ、貴族達は争うように忠誠を誓い、他国との関係も良好だ。

タバサが平和をもとめ、エルフが対話に応え、多くの人がそれを支持したことで、地への執着を持つロマリアもしばらくは動けなくなった。

大隆起の問題についても国と種族の垣根を越えて対策が協議されている。

何もかもが上手くいっていると云えた。

とはいえ、すべてがうまくいったわけではない。

国や種族のいがみ合いがすべて解決するはずもない。

利権の衝突や、感情的対立が全面的になくなることはない。

散発的な争いや紛争は今後も起こるだろう。

それでも、ハルケギニア全土で目撃された英雄譚と、

イザベラの遺言によりタバサに忠誠を誓ったガリア北花壇警護騎士団達は、タバサが望む平和を支え続けている。

タバサは、一日でも長くこの平和を保とうと思った。